



第 176 号

二〇二五年三月二五日発行
発行者 奈良 県 立
橿原考古学研究所
奈良県橿原市畷傍町一番地
編集者 清水 康 二

所長就任五年を経過して

青 柳 正 規

一、五年間心を配ってきたことと今後の展望

橿原考古学研究所（以下、橿考研）のもつ強みは、以前から所員の皆さんにお伝えしているように、行政発掘や学術発掘をするだけでなく、その後の出土遺物に対する処置や分析をおこなう保存科学部門もあることです。加えて考古学の場合、発掘調査報告書を出版すると、それewithと段落という感じになります。橿考研には考古学専門としては規模の大きい附属博物館があるため、そこで発掘調査に基づく研究成果を展示、発表することができます。これらのことは、橿考研が考古学の持つ可能性を十分に発揮し、カバーすることができるといわれています。これは橿考研の特色だと思いい、ことあるごと

にこの長所を伸ばしていくような行動を所員に促してきました。幸いにもそのことを所員の皆さんが理解して、発掘調査をおこない、報告書を出版して、講演会、展示、現地説明会などを活発に開催してくれました。とはいえ、考古学の発掘調査には資金が必要で、一般の市民の方々の理解と応援が不可欠です。発掘調査にともなう現地説明会、展示、講演会に対しても橿考研は組織として迅速に対応ができるのは非常に素晴らしいことです。考古学の社会に占める守備範囲を拡大するということが非常に大切だと思いい、この五年間、所員に対して繰り返し話をしてきたつもりです。

発掘調査というのは、職人芸的な仕事です。非常に地道な作業の積み重ねで、その発掘調査の上手下手を

目 次

所長就任五年を経過して
曾爾高原お亀池付近採集の石器
令和六年度大韓民国における研修略記
令和六年度「奈良県戦略的専門分野交流事業」研修報告
研究会・いのししの会、アトリウム展
案内、附属博物館展示案内

青柳 正 規 1
光 石 鳴 巳 3
西 浦 照 5
中尾 真 梨 子 6
編 集 者 8

評価することはなかなか難しいものです。しかしながら、その発掘技術というものがあからこそ、考古学者としての基礎ができていくのだと思いいます。その点で、橿考研の所員は皆さんが発掘現場の経験を積んでいて、基礎的な部分がしっかり身につけています。その上で論文や報告書を執筆し、あるいは展示会を企画する、講演をおこなうということから、考古学が研究者のためだけの考古学とならないように、その成果を市民全般とも共有できる形になって

古学協会の会員数減、あるいは各大学での考古学専攻に進む学生・卒業生が減少していることを憂慮するからです。それは少子化ということもありますが、考古学という地味な分野が、若者たちから避けられていることをとても心配しています。このことに対応する意味でも、橿考研が日本を代表する考古学的調査・研究をする組織として、考古学の面白さを伝える役割を担うことが重要です。

このことよって、奈良県ひいては日本列島の先史時代から現代までの歴史文化の展開を、市民と一緒に共有することに貢献できると考えます。発掘調査による技術の熟練と、それを基にした市民社会への貢献という部分をこれからも深めていかなければなりません。

橿考研は重要な遺跡や資料が周辺に数多くあり、恵まれた立場にあるので、そういうことを世間にもっと訴えていく必要があります。例えば、毎年秋におこなっている公開講演会ですが今年「富雄丸山古墳出土の蛇行剣と保存科学」と題して、奈良会場だけではなくて東京会場でも講演会を開催しました。五〇〇〜六〇〇人規模の会場を使用したのですが、このような大規模の講演会では

市民社会への貢献をなぜ重視するのかと言えば、最近の新聞報道でも二〇年ぐらい前と比べると、日本考

すと、計画から準備作業まで苦労は多いのです。しかしながら、考古学に対する理解を深めるためには非常に重要なことなので、これからもより一層の力を注いでいくべきです。

それと同時に、市民に考古学の楽しさと重要性を理解してもらう活動も檀考研内で拡がりつつあるので、それに関しても力を入れていきたいと考えています。例えば、最近のことですが、檀考研チャンネルを一日で一〇本ほど視聴したことがあります。YouTubeで伝統工芸等の様々な動画を見ることがあるのですが、それらと比べても率直に言うて面白く、本当によくできていてという感想を持ちました。こういう動画での普及をもっと増やして、より多くの人に見てもらえるようにしていくべきです。動画はわかりやすくよいものだと思いますが、まだ本数が少ないようです。早急に五〇〇本の動画作成を目指し、その後は一〇〇本の動画作成を達成したいと思えます。とは言っても良い動画コンテンツの作成には、資金が必要なことは否めません。奈良県予算や科学研究費、その他の公的助成金が檀考研の活動を支える資金となっていますが、それだけでは賄いきれませんの

で、財政的基盤を整えるのも所長の仕事と考えています。

二. 研究成果の社会還元

檀原考古学研究所は、日本有数の研究機関ですので、当然のことながら、研究活動が重要な位置を占めています。ですからこの五年間で、皆さんが私の活動指針をよく理解してくれて、発掘調査・機関研究だけではなくて個人の研究も深めるという意味で、科学研究費の申請数も増えていき、それにもなって採択数も増えました。五年前と比べてリサーチアクティブな組織になりつつあり、それが定着しつつあると思えます。これからより一層、所員それぞれの研究を深めていく必要がありますが、ここで参考に、私の経歴を紹介します。

大学在職時は、自分が従事している分野の学問をどう発展させるか、あるいはその分野にどれだけ貢献するかということが一番の使命なので、最先端の論文を書くということに最優先の課題としていました。二番目の課題として、それをもう少しやさしく、丁寧に紐解いて市民の方々にもわかってもらえるような一般書を執筆することを考えていまし

た。三番目は、専門分野の学問の体系的概説書を書くということでした。

この三つが非常に重要なのですが、体系的概説書を執筆する時間がありませんでした。ポンペイの発掘成果全体像を体系的に整理したものを執筆している最中で、まだ三分の一ぐらいの八〇〇枚の原稿しかできあがっていません。現状では、生きているうちに原稿をすべて用意できるかどうかわかりません。その代わりに、海外の学会で古代の地中海地域の別荘文化というものをきちんとひとつの研究ジャンルにする必要性を感じ、一六年ぐらい前に、『アモエニタス』という学術専門誌をイタリアで発行しました。今、一二巻目を編集中で、編集主幹として集まってくる論文を全部査読し、公刊するということをやっています。論文は欧米語のすべてを対象としていますので、査読には多くの時間を取られますが、日本人が専門学術雑誌を海外で創刊して、その編集主幹をやるといえるのは、今までの日本の西洋文化研究の中で私が初めてのことで

す。最近では編集主幹としての仕事に一区切りをつけることも視野に入れて

います。現在途中になっている体系的概説書を執筆できていない点はやや心残りです。ただし、海外で古代の別荘文化を主題とした学術専門雑誌を創刊し、その編集主幹となって、学術的にも意義のある、多数の論文を世に問うことができたのは概説書を世に出すことと同等以上の価値があると思います。

三. 奈良県内での活動への抱負

これまでの所長としての体験から関心を持ち、これから活動していきたいのは、例を挙げるとするならば、飛鳥宮跡と寺院関係です。檀考研は重要な古代寺院である唐招提寺や東大寺で発掘を継続してきました。現在は遺構の保存や現在残っている伽藍の小区域の発掘調査にとどまっています。そこからは寺院の歴史を凝縮しているような調査成果がありますが、私自身、檀考研の皆さんと小さな面積でよいからこのような遺跡をいっしょに考えながら発掘してみたいという希望を持っています。寺院や伽藍の変遷の歴史は多岐にわたるので困難なことではありますが、発掘担当者から十分なレクチャーを受ければ、実現できるかもしれ

ないと考えています。

去年飛鳥宮跡に行つて感銘を受けたのは、建物を構成する掘立柱を抜き取つたあと、その抜き取り穴を故意に少し色の違う黄色土で埋めていたことです。古代人が柱を抜き取つたあとに違う土を入れるのを確認して、後始末の仕事の丁寧さを実感しました。現代人にはない手法をみると、改めて古代の人たちの質素さや謙遜さ、傲慢さのまったくない生活が感じられました。しかもそれが王宮というところでのことなので、とても素晴らしいと感じたのです。

このように古代人の感覚にふれると、現代人はある意味退化しているように思います。現代人は建物を壊しても重機で残骸を除去して、それをダンプカーに載せて、更地にすれば終了です。しかしながら、ひとつひとつの遺構の中に違う色の土を運んできて埋めるといふのは、そこに存在した建物などへの感謝やリスペクトがあります。そのようなことに感銘を受けたことが大変印象に残っています。

檀考研の次の五年の成果にも、大いに期待して私の挨拶に代えさせていただきます。

曾爾高原お亀池付近採集の石器

光 石 鳴 巳

一 はじめに

お亀池は奈良県東部の宇陀郡曾爾村大字太良路に所在し、秋にはスキの名所としても名高い曾爾高原の中央部に位置する湿原である。もとは太良路池と呼ばれていたが、池に棲む大蛇がお亀という女性の姿で現れたという伝説に由来してお亀池と呼ばれるようになったともいう。

本稿では、筆者が二〇二〇年八月一〇日にお亀池を周回する遊歩道で採集したサヌカイト製の石器二点を紹介する。お亀池周辺を含む曾爾高原一帯は周知の埋蔵文化財包蔵地として扱われるが、これまでに出土遺物は知られていない。表採遺物ではあるが、資料化により遺跡の理解に資すると考えたものである。

二 採集地点と周辺の環境

曾爾高原一帯は『奈良県遺跡地図』(以下、『遺跡地図』)に遺物散布地(二〇四一〇〇〇八、未命名)として登録されるが、「遺物」の欄に「サヌカイト」とあるだけでそれ以上の情報は記されていない。文化財保護

委員会による一九六八年三月刊行の『全国遺跡地図(奈良県)』には登録されておらず、一九七五年三月刊行の『遺跡地図』初版ではじめて登録される。『遺跡地図』の作成に先だ

つて、一九七三年五月から翌年三月にかけて実施された分布調査に際して認識された遺跡とみられる。記載内容は現行のWeb版に至るまでおよそ五〇年にわたつて更新されていない。散布地の範囲内では一九七六年に国立青少年自然の家建設に伴う発掘調査¹⁾、二〇二三年に曾爾高原森林公園の整備に伴う発掘調査²⁾がおこなわれたが、遺構・遺物ともに確認されていない。

お亀池湿原の堆積物からは、古環境復元に資する知見が得られている。花粉分析結果からは、晩氷期から現代まで六段階にわたる森林型の変化があったことが明らかになっている³⁾。また、約一千年前に降に微粒炭が連続的に含まれるようになり、イネ科花粉を中心として草本花粉が高率で認められるようになることから、およそ一千年前に降に山焼き

によってスキ原が維持されたことを示すと推定されている。さらに、七千年前頃にみられる一時的な微粒炭の増加も縄文時代早期以降に考古資料が増加することと調和的で、人の活動との関係が想定されている⁴⁾。

三 採集時の状況と石器の概要

石器を採集した地点はともにお亀池の北西側で、西から北へめぐる未舗装の周遊路上である。両地点はおよそ一〇m離れている。以下、採集した順に石器1・2と呼称するが、石器1は路面に食い込むかたち、石器2は完全に地上に露出した状態であった。遺物を包含する土壌が当地

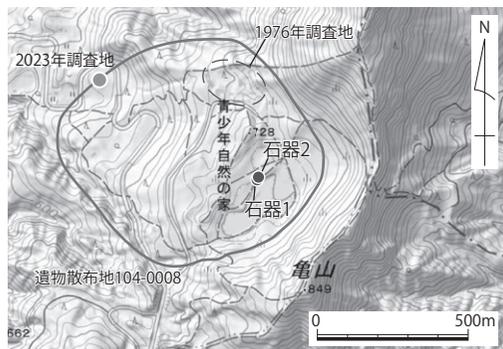


図1 お亀池周辺の地形と石器の採集地点
(背景図に国土地理院地形図・陰影図を利用)

の本来のものであるかどうか確認はないが、路面が削剝を受けた結果として遺物が露出しているように見受けられた。

石器はいずれもサヌカイト製であ

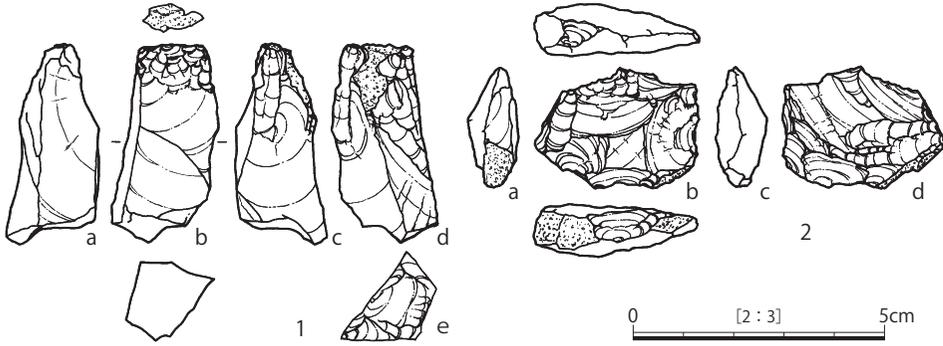


図2 石器実測図

る。石器1(図2の1)は角柱状を呈し、上面からd面の上半にかけて原礫面を残している。板状の剥片が折断したものとみられるが、本来の主要剥離面(腹面)であるポジティブな剥離面ははっきりしない。上部に認められる細かな剥離痕を含むb面上半部を打瘤裂痕とみれば、b面が主要剥離面の可能性がある。c面の成因は判然としないが、b面を生じた打撃に連続するようにもみえる。これが正しければ、剥片剥離と同時に器体を分割する割れを生じたことになる。c面の剥離末端はe面に連続しており、長軸方向にも折断する結果を招いたらしい。

石器2(図2の2)はd面の上半が素材剥片の腹面に相当するポジティブな剥離面とみられるが判然としない。二次加工が図の上下に認められるが、いわゆる「潰れ」が顕著ではなく、楔形石器に通常の裁断面も認められないが、扁平なレンズ状の断面形状を強調して楔形石器と考えておきたい。

このように、二点の器種分類についてはともに問題が残る。何らかの器種の素材という見方をすれば、石器1は楔形石器の素材となる可能性があり、扁平な石器2は石鏃などの

素材としての評価も可能かもしれない。曾爾村域で縄文時代の遺跡が比較的多い現状と、各々の風化の程度を踏まえれば、縄文時代に帰属すると考えて差し支えないだろう。

四. まとめ

本稿で紹介した二点の石器は、個別の評価に問題は残るが、お亀池周辺に設定された遺物散布地の遺物としてはじめて資料化されるものであるという点において意義が認められるだろう。現地は、時折おこなわれる公園整備に伴う土木工事を除けば地形改変の機会も乏しい。埋蔵文化財の保護という観点からは懸念の少ない場所と言えるが、資料収集の機会が多くないということでもある。今後も、遺跡としての曾爾高原に注意を払い、状況の把握に努めることが必要である。

なお、前園實知雄氏からは一九七三・七四年の分布調査当時のことについてご教示いただき、内山ひろせ氏から石器の観察所見についてご意見をいただいた。末筆ながら記して感謝申し上げます。

註

(1) 乾 健治「伝説」『曾爾村史』、一九

七二年

(2) 奈良県遺跡マップ (<https://www.kashikoken.jp/nakuru/gis/>)、二〇二

四年五月一日閲覧

(3) 『遺跡地図』の記載を裏付ける遺物や記録類は確認できていない。当時のことを知る前園實知雄氏によれば、地元での聴き取りをもとにした可能性はあるらしい。

(4) 未報告。一九箇所の特レンチで計五〇㎡の調査である。

(5) 奈良県立橿原考古学研究所編『太良路遺物散布地』曾爾村文化財調査報告書第三集、二〇二四年

(6) 竹岡政治・高原 光・田中康之「奈良県曾爾高原お亀池湿原の花粉学的研究」『京都府立大学学術報告 農学』第三四号、一九八二年

(7) 井上 淳「累積性土壌の微粒炭と植物珪酸体から読み解く火入れ(山焼き)の歴史」『季刊考古学』一四五、二〇一八年



令和五年度大韓民国における研修略記

西浦 熙

一. はじめに

ここでは、二〇二四年一月一七日から五月三〇日にかけての韓国、国立文化財研究院（現国立文化遺産研究院）、国立扶余文化財研究所（現国立扶余文化遺産研究所）での研修報告をおこなう。

今回の派遣はまさに青天の霹靂というかたちでお話を賜った。光栄なお話をいただき、二つ返事で行きますと応えたが、問題がいくつもあった。それは韓国考古学は大学の概説講義程度でしか触れたことがなく、韓国語も全くわからない点であった。幸い出国までには五ヶ月ほどあったため、韓国考古学も語学もたっぷり勉強して、行く頃には問題なしだと高を括っていたが、生来の怠惰な性格故にそうはならず、なんとか生存に必要な最低限の知識で旅立つこととなってしまった。

二. 国立文化財研究院での研修

二〇二四年一月一七日に仁川国際空港に到着すると、事前に連絡を取っていたチョ・ミナさんが空港で待

っていてしゃべった。どうやら持ち前の晴れ男も韓国では意味をなさないらしく、大雨であった。さらに仁川国際空港から研究院のある大田までは、車で移動したが、車中でも思っていたより韓国語がわからず、先行きが不安になる三時間であった。

大田の国立文化財研究院での生活は、到着当初はキム・ヨンス院長（当時）との食事会など挨拶や所内紹介も多かったが、その後は所内での情報収集、研究と踏査・資料見学の日々を送ることとなる。滞在期間中の見学資料や検討内容については以前に簡単に報告したことがあるので（西浦二〇二四）、ここではその過程について少し書きたい。基本的に韓国は日本よりもデータベースが進んでいるため、報告書や論文は所内や公共のサイトのデータベースをあたり、PDFが無いものは書庫で探した。韓国はPDFが多いという話は私含め日本人もよく聞いたことがあるかもしれないが、ひとつ盲点もあった。それは学会やデータベースの会員でない場合、アクセスできない

資料も存在するという点である。そういった資料にアクセスしたい場合は、実物は書庫などにはあるものの、我々外部の人間にとっては今後のことも考えると、いかに頼める人が多いかを鍵を握るよう感じた。そんなこともあり、私も幾度か同年代の研究者に依頼した経緯がある。

考古資料の調査については比較的良好な環境で資料を見学させていただったので、考古研究室のイ・ヨンスさん、ユン・ヒョンイさんはじめ調査に同行いただいた皆さんには非常に感謝している。資料見学は時に良い環境がすぎるため、今回の調査では遺物コンテナの山に埋もれながら土器を見学するようなことはなく、少々物足りない感も否めなかった。これも上記の資料収集同様、依頼できる人脈が鍵なのかもしれない。

見学は事前に見たい資料をピックアップし、それを部屋に出してきていただくかたちほとんどであった。今後同じ轍を踏む方が出ないようにあえて書き記させていただけでなく、報告書などの資料的制約もあるが、日本にいる段階でもっと資料や見学の方向性を精査しておけばよかったという後悔もあった。

三. 国立扶余文化財研究所での研修

ここからは、扶余文化財研究所での生活について記す。これについても参加現場の概要や見学先は先の報告を参照いただくとして、ここでは現場での生活や雑感について述べたい。扶余では郡内のマンスリーアパートの一室から徒歩三〇分（うち一五分は登山）の距離にある扶蘇山城第一七次調査に参加した。調整は、令和六年度に檀原考古学研究所に研修に来られたオ・ドンソンさんやイ・ジョンヒさんをはじめ、同じく扶余文化財研究所のキム・ナヒョンさんがしてくださっていた。感謝申し上げたい。郡内の目抜き通りを、定林寺、官北里遺跡を抜けて扶蘇山を登ってゆく通勤路で、現在に至るまでの人生の通学・通勤路を顧みても屈指のお気に入りコースである。現場は、私含め四〜五人の調査員で行っていた。全員が近い年齢で、非常に居心地の良い現場であった。チェ・ジウォンさん、アン・ソマンさん、パク・ソンヒョンさん、クォン・ウンヨンさんへ感謝申し上げたい。調査現場には一人統括的な役割がいて、残りでその時々必要な作業（検出、分層、実測、時に掘削）を分担し、そこは日本の複数人現場と変わ

らなかった。ひとつ印象的であったのが、遺構への線入れが、白線のみでなく色彩豊富であった点である。扶蘇山城では、黄色・近現代・攪乱、赤・朝鮮時代、緑・高麗時代、青・統一新羅時代、白・百濟時代と五色であった。メモ的に使う分にはわかりやすいため、日本においても有効かもしれないと感じた反面、検出の段階で時にかなり強く主観が介在するため、一長一短とも感じた。ほかに差異を考えると、ドローンや手持ちのGPSなど、有効なものも調査に取り入れるスピードは、韓国の方が早く感じた。

扶余文化財研究所などの地方の国立研究所は中央の大田に比べて、自分と歳の近い二〇代後半から三〇代の所員が多い印象を受けた。そのため気にかけてもらうことも多く、公私問わず踏査や見学に連れ出してくれることが多かった。また、イム・スングヨン所長が「扶余のオンマ(お母さん)と呼んでくれ」と言ってくださったように、歳の離れた先輩方もまさに家族のように接していただき、出発前日の送別会では誕生日の近い私にキーキまで買ってくださった。その際の三角帽子は今も檀考研のデスクにしっかりと残している。

四. おわりに

最後に、二一世紀前半における語学学習の記録として後世に向け報告すると、韓国語については、自ら単語帳と文法書での学習を進めていた。あとは、女性アイドル(特にNew Jeans)の動画を鑑賞、もとい学習に励んだ。昨今のアイドルはMV以外にも企画動画などのコンテンツの配信が盛んであるため、気軽に生の若者の韓国語に触れることができる。加えて、文化財研究院と当研究所企画課の皆さんの調整を賜り、週に一度外国人向けのボランティア韓国語教室へ通う機会もいただいた。扶余でも現場に通いながら毎日同年代の研究者とコミュニケーションをとることで、人脈形成にもおおいに役立ったと感じる。帰国後も、個人的に動画視聴や、外国人と語学交換をおこなえるスマホアプリ、検定試験の受験などを通し、趣味として学習を楽しんでいる。もちろん韓国から来られる研究者とは現在も積極的にコミュニケーションを図り、また韓国考古学会を訪問し、お世話になった皆さんと再会するなど、築いた関係を継続するようにも努めている。到着時の仁川からのどこか不安な三時間とは異なり、帰路の仁川

への三時間は、談笑しているとあつという間で物寂しい反面、そう感じられるようになった韓国での五ヶ月に感謝した。

ともあれ、今回の派遣は大きさはなく私の研究人生、はたまた人生そのものにとっても大きな影響を与える五ヶ月間であった。ここでお名前を挙げることができないが、ご調整いただいた上記韓国のご関係者

令和六年度「奈良県戦略的専門分野

交流事業」研修報告

中尾真梨子

一. はじめに

本研修は、奈良県国際課「奈良県戦略的専門分野交流事業」により実施された。この事業は二〇一四年度から開始し、橿原考古学研究所からの派遣は今回で八回目となる。期間は二〇二四年一月一日から二〇二五年一月三日までの三〇日間。陝西省の受け入れ先は、西北大 学文化遺産学院であった。

二. 研究と交流と語学

今回の研修は、出土有機質遺物の発掘現場での対応から保存処理まで

のみならず、ならびに研究所の皆さんにいまいちど感謝申し上げます。

西浦 熙二〇二四「国際交流事業研修報告 第四六期(令和五年度) 調査・研究助成を受けた国際文化交流事業における調査・研究の概要報告」研究紀要 第二八集 公益財団法人由良大和古代文化研究会

の現状と課題を、中国と日本で比較研究する、という計画を立て臨んだ。中国では、出土脆弱遺物を発掘現場から安全に移動させるためメンソールを使用する、日本ではあまりみられない方法がある。そこで、メンソールの発掘現場での使用について知ること、今回の目標の一つとした。メンソールはハッカに含まれる成分で、中国では発掘現場での遺物強化・仮固定材料の一つとして一定の効果を確認されている。メンソールを出土脆弱遺物に用いる研究「考古発掘現場出土脆弱遺物臨時固型材料

研究」が、二〇一六年国家文物局文物保護科学和技术創新賞の一等賞を受賞しており、中国では長期間にわたる研究成果および実績がある方法だ。

研修は西北大学文化遺産学院のほか、陝西省考古研究院、秦始皇兵马俑博物館、山東省文物保護修復と鑑定センター、西安市文物保護考古研究院、荊州文物保護センターなどでおこなわれた。メンツールの使用法をはじめとして、中国での有機質遺物保存処理の傾向と実際について貴重な情報を得ることができた。対面で意見交換しないと得られない、実務的な細かい部分まで知ることができたのは大きな成果である。

また、日本と中国では、有機質遺物の出土状況が異なる。中国の大半の地域では有機質遺物は乾燥した状態で出土するが、湖北省や湖南省などの地域では日本と同様に湿った状態で出土することがある、とご教示いただいた。そこで、土日を利用して湖北省や湖南省を訪れ、曾侯乙墓や馬王堆漢墓などの遺跡や博物館を見学した。

さらに、研修期間中に西北大学考古学科二〇二四年度科研報告会への参加や、各専門機関での自身の研究

報告、西北大学文化遺産学院の生徒たちに講義をおこなうなど、多くの研究会参加、発表の機会をいただいた。中国、日本の共通点と相違点を認識し、議論できたのは大変貴重な機会であった。

なお語学であるが、当初はまったく聞き取れなかった中国語が、これらの研修や交流を続けるうちに、かろうじて日常会話聞き取れる程度に上達した。しかし、残念ながら会話話のままならないまま帰国した。最近の翻訳アプリは精度が高く暮らすには困らないが、現地の言葉を自力で聞き取り、さらに会話ができるか否かで、得られる情報量は当たり前異なる。今年の目標は、まずは中



西北大学文化遺産学院での講義の様子

国語の綺麗な発音で自己紹介ができるようになるうと、元日の西安で誓った。

三. 西安での生活

中国での生活経験が豊富な齊藤希所員と北井利幸所員から、渡航前の準備についてしっかりとレクチャーを受けていたおかげで、難なく生活をスタートすることができた。

まず、中国で生活するには支付宝 (Alipay) が欠かせない。コンビニでの買い物、公共交通機関の乗車および支払い、タクシーの手配、あらゆる場面で支付宝が大活躍した。多くの支払いが電子決済でおこなわれており、西北大学の先生方によると、最近では現金を持ち歩いた記憶がないというぐらいだ。

また、近年の中国では博物館に入館するには予約必須の施設が増加しており、予約の際に支付宝または微信 (WeChat) が必要であった。微信は、チャットや支払いなどの様々な機能が含まれたアプリだ。渡航前から今に至るまで、中国の皆さんとの連絡手段はこの微信を使用している。名刺交換の代わりに微信の連絡先を交換することが主流で、大量に準備した名刺は一枚も使うことなく

帰国した。

四. おわりに

中国の関係者の皆様には、大学の試験期間や春節前という、一年で最も忙しい時期に研修期間が重なったにもかかわらず、大変親切にご対応いただいた。

西北大学文化遺産学院の毛維佳先生には、渡航前から研修終了まで、研修内容や予定の調整などさまざまにご助力いただいた。関係各所への連絡調整や研修に同行してくださった孫鳳先生、省内だけでなく遠方での研修の面倒をみてくださった孫麗絹先生、日本語が堪能で進んで通訳を引き受けてくださった陳欣楠先生、劣化した木材について熱く語ってくれた李仁先生、楽しく酒を酌み交わした楊璐先生：お世話になったすべての皆様のお名前を挙げ感謝の気持ち伝えるには、このスペースではとても足りない。

中国で暖かく迎えてくださったすべての皆様と、日本から快く送り出してくださいました皆様のおかげで、生活面は不安を感じることなく、学的には大きな成果を得て、研修を終えることができました。末筆ながら感謝申し上げます。

研究集会・いのししの会

第三七四回研究集会が令和七年一月一三日(月・祝)に研究所講堂にて開催され、田中晋作特別指導研究員が「古墳時代中期の軍事」と題して発表されました。さらに公的研究費成果発表会(発表者・岩崎郁実・松尾樹志郎・富田 樹・小倉頌子)が開催されました。研究集会終了後には、正面玄関前で記念撮影をおこない、いのししの会を檀原オーケテルにて開催しました。研究集会は七九名、いのししの会には七八名の参加がありました。(順不同、敬称は略させて頂きました。)

〔公財〕ユネスコ・アジア文化センター 森本 晋、〔奈良国立博物館〕井上洋一、〔公財〕修徳会 天根俊治、〔公財〕由良大和古代文化研究協会 泉森 皎、〔友史会〕下尾茂敏、田中吉満・廣田清雄・高岡弘行・山本哲夫・安藤美津江・筒井和子、〔一財〕檀原考古文化財団 大西寿江・青木明美・藤原三津子・梅原章一、〔報道関係者〕大森瑚子・小畑三秋・関口和哉・篠崎善博・緒方英俊・今井邦彦・竹内義治・柳沢伊佐男、〔文化財課〕杉村和彦、〔世界遺産室〕森井順之、〔なら歴史芸術文



研究所玄関前での記念撮影

(着席者左から、森岡秀人、中井一夫、前園實知雄、井上洋一、田中晋作、青柳正規、河内國平、杉村和彦、川上洋一、青柳泰介、稲村達也)

化村)平田千江子・藤元正太、〔特別指導研究員〕前園實知雄・稲村達也・

右島和夫・千賀 久・田中俊明・田中晋作、〔共同研究員〕中井一夫・泉武・森岡秀人・鹿谷 勲・梅咲直照・高田将志・橋本裕行・井上主税、〔研究所員〕青柳正規・岡林孝作・川上洋一・光石鳴巳・鈴木裕明・杉原逸貴・箕倉永子・中村健太郎・高木清生・清水康二・北井利幸・齊藤 希・水野敏典・米川裕治・奥山誠義・河崎衣美・小倉頌子・青柳泰介・木村理恵・平井洸史・伊東菜々子・米川仁一・東影 悠・西浦 熙・岩崎郁実・小泉翔太・黒澤ひかり・富田 樹・松尾樹志郎・横山 舞・米田敏幸・大西貴夫、〔関係者〕河内國平・今尾文昭・石黒勝己、〔海外研修生〕朱雨霽・韓志瑄・蔣企明

アトリウム展示案内

研究所一階アトリウムでパネル展示をしています。今回は『研究員による最新研究成果』を四月四日(金)まで開催中です。

今回はパネル展示『桜井茶臼山古墳の調査風景』を四月八日(火)から五月三〇日(金)までおこないます。詳細はホームページなどで公開

しています。

附属博物館展示案内

◎二〇二五年度 春季特別展

「王陵 桜井茶臼山古墳」

会期：令和七年四月一九日(土)

～六月一日(日)

全長二〇〇m超の前方後円墳である桜井茶臼山古墳。近年、一〇三面超の銅鏡が確認されたことでも注目を集めたこの古墳は、初期ヤマト王権の王陵の一つと考えられており、副葬品などの内容が明らかかな王陵として極めて貴重な事例です。

このたびの特別展では、桜井茶臼山古墳より出土した品々を、近年の研究成果を併せて一挙にご紹介するとともに、古墳時代前期を代表する関連資料との比較から、王陵・桜井茶臼山古墳の実像に迫ります。

研究講座(全三回)

第一回 四月二七日(日)

第二回 五月一日(日)

第三回 六月一日(日)

列品解説会 各日とも一一時

五月三日(土)

五月二四日(土)

六月一日(土)